

事業計画書

第11期（令和8年8月1日～令和9年7月31日）

一般社団法人ハビリスジャパン

I ハビリスジャパンのスローガンの設定

2026年8月1日、一般社団法人ハビリスジャパンは設立10周年を迎える。次の15周年、そしてその先の未来を見据え、新たな一步を踏み出す。15周年に向けた指針として、子どもたちと会員・クルー、それぞれに向けた2つのスローガンを掲げ、活動を推進していく。

【子ども向け】

『『やってみたい!』を、みんなでカタチに。』

子どもたち一人ひとりの「やってみたい!」という気持ちを大切に、その想いを実現できる機会や環境づくりを進める。仲間とともに挑戦し、一人ひとりが自分らしく成長できる場を広げていく。

【会員・クルー向け】

「つながりを深め、みんなで育てるハビリス」

一つひとつの活動の質を高めるとともに、子どもや家族、会員、寄付者、クルーとのつながりを深める。誰もが参加しやすく、ともにハビリスジャパンを育てていく持続可能な組織づくりを目指す。

II 活動理念

1. 手や足に特徴のある子どもたちの成長と活動に“適した“環境を整えることで一人ひとりの可能性を広げ、成長を支え、未来を育む支援を行う。
2. 手や足に特徴のある子どもたちが、それぞれに適した義手や義足などを活用できる環境を整え、社会参加に向けた包括的な支援体制を構築する。また、活動に安全に挑戦できるための情報提供と交流の場を提供する。
3. 医療・教育機関等の関係する団体と連携しながら事業を実施することで、子どもたちが挑戦できる場の拡大を目指す。
4. 積極的に情報発信を行うことで社会への認知度向上を図る。

III 今年度の主な事業

1. 手や足に特徴のある子どもたちの社会参加の支援事業

手や足に特徴のある子どもたちが、より良い社会生活を送るための機会を創出することを目的として、年間を通じて継続的にイベントを開催する。居住地域にかかわらず参加できるよう、対面形式に加え、Web会議システムを活用したオンライン・ハイブリッド形式での開催や地方開催を継続し、参加機会の地域格差の解消を目指す。

手や足に特徴のある子どもたちやその保護者・家族は、「自分にもできるだろうか」といった不安から、新しいことへ踏み出す第一歩が難しい場合も少なくない。そのため、不安や疑問に寄り添い、安心して参加できる環境を整えることで、「やってみたい」という気持ちを行動へとつなげ、成功体験を通して自信や自己肯定感を育み、次の挑戦へのきっかけを提供する。

また、イベントを通して、全国の当事者や家族、医療・教育・福祉などの専門職、支援者、協力団体が交流・連携できる場を創出することで、地域を超えたつながりを育み、子どもたちが自分らしく挑戦できる社会の実現を目指す。なお、開催にあたっては、参加者およびスタッフの安全を最優先とし、必要に応じた感染症予防対策をはじめ、安全管理を徹底した上で実施する。

【定期開催イベント】

- ・パラテコンドー教室（年間を通じたレギュラーイベント）
- ・運動教室（UTSSI との共催）
- ・ダンス教室（UTSSI との共催）

【企画イベント】

＜運動系＞ スノーボードイベント・運動教室

＜文化系＞ スライドリコーダー体験会・こども科学実験教室・ネイル教室

※イベントのうち1種類は、子どもたちへのアンケートで寄せられた「やってみたい!」という声をもとに企画する。

【地方開催イベント】

- ・大阪 ・名古屋 ・熊本

2. リハビリテーション・ハビリテーションの教育・啓発事業

(1) 専門職向け研修・普及啓発

医療・福祉・教育などの専門職を対象に、義肢に関する知識や適切な取り扱い、義肢を使用する方の生活や支援について学ぶことができる講演会やセミナーを開催し、専門職の育成および義肢に関する普及啓発を推進する。また、スライドリコーダーについては、教育現場との連携を必要に応じて進め、学校での活用や普及を支援するための啓発活動も行なっていく

【開催イベント】

- ・IVI（アイビー）義手ミーティング（ISPO 日本支部 共催）

(2) 当事者・家族交流

当事者やその家族が互いにつながり、支え合える関係づくりを目的として、交流会や相談会を開催する。また、先輩当事者やその家族が経験や知恵を共有することで、子どもや家族が安心して学び、交流できる機会を提供する。さらに、今年から発足した「ファミリーチーム」を中心に、実際に活動へ参加している家族ならではの経験を生かした情報発信や相談支援を行い、「参加してみたい」と思える環境づくりを進める。

一緒に挑戦する仲間との出会いは、子どもたちにとって大きな力となる。成功や失敗を分かち合いながら挑戦する経験や、仲間が挑戦する姿に触れることは、「自分もやってみたい」という意欲や自信を育み、次の一步を踏み出す力につながる。初めて参加する子どもでも自然に仲間とつながり、継続して挑戦できる関係を育むことで、子どもたちの成長を支えていく。

【開催イベント】

- ・小学校就学前相談会
- ・家族交流会（家族会）
- ・ファミリーチームによる相談・情報発信

(3) 絵本を通じた啓発活動

絵本「いろんなおてととぼく」の販売を継続し、全国にいる当事者家族や専門職などの関係者が絵本を入手しやすい環境を整える。また、手足に特徴のある子ども及び家族に関わる関係者が義肢や当法人について知る機会を提供する。

3. 小児用アクティビティ・日常生活用義肢等の開発・調査研究事業

(1) 身体運動能力向上のための調査

四肢形成不全児の健全な発達が促されるよう身体運動能力向上につながるプログラムの研究・開発・提供を目標とし、運動イベントでの体力測定を中心に子どもたちの身体運動能力のデータ収集及び、運動習慣や運動支援に関するアンケート調査を行う。また、得られた情報から日本製の小児用アクティビティ・日常生活用義肢等の開発につなげる。これまでに蓄積したデータを分析・整理し、学会等での発表を通じて研究成果の発信を行う。

(2) 運動用手先具と自助具の開発・調査

企業や関係団体と連携し、小児用アクティビティ用手先具や日常生活用手先具の開発を進める。引き続き、新たな自助具・手先具の開発に向けて、開発テーマの選定を含め、協力企業と今後の開発方針や戦略を検討していく。

(3) スライドリコーダーの改良と普及

三菱財団社会福祉事業・研究助成を受け、「スライドリコーダーの製品化と障害のある児童への適応評価、有用性の実証および普及支援活動」を実施した。その後、クラウドファンディングを通じて、多くの子どもたちへスライドリコーダーを届けることができた。2026年度は、利用している子どもや家族へのアンケートを実施し、使用状況や要望を製品の改良・開発に反映していく。また、学校など関係機関と連携し、必要な子どもたちが入手しやすい環境づくりを進めるとともに、販売開始後は普及活動にも取り組む。

(4) 上肢欠損児の高機能義肢使用機会の提供と有用性の評価 [日本財団]

(2026年度) 日本財団(令和8年4月～令和9年3月)において、「上肢欠損児の高機能義肢使用機会の提供と有用性の評価」として4,419,000円の助成を受けている。小児四肢形成不全児に対し、次世代型高機能筋電義手を試用する機会を提供し、その有効性および安全性を検証する。あわせて、筋電義手の使用が日常生活動作や社会参加、発達に与える影響を明らかにすることを目指す。本取り組みを通じて、小児期から高機能補装具を活用できる環境の整備に必要な知見を蓄積し、将来的な国内支給制度の確立に向けた基礎資料を作成することで、同様の課題を抱える子どもたちの福祉環境の向上に貢献する。

4. 小児用アクティビティ・日常生活用義肢等のレンタル事業

マット運動用絵手先具(TRS社製 Shroom Tumbler/今仙技術研究所社製 TamTam)、鉄棒運動用手先具(今仙技術研究所社製 Hamo)、筋電義手(Ottobock社製)、縄跳び用手先具(今仙技術研究所社製 スキッピー)の貸与を継続する。イベントでは、運動用義手、義足を試用できる模擬義手を活用し、手足に特徴のある子どもたちが運動用部品を体験できる体制を整える。

5. 持続可能な組織づくり

(1) 会員・寄附者・提携サポーターとの関係づくりと社会への情報発信

本法人の活動理念や目的を広く発信し、ハビリスサポーター、コーポレート会員、寄附者の新規獲得を進めるとともに、既存会員・寄附者との継続的な関係づくりを強化し、安定した運営基盤の構築を目指す。

中期計画策定時に実施したアンケートでは、「活動内容や思いが伝わりにくい」といった意見が寄せられた。この結果を踏まえ、子どもたちの成長ストーリーや活動の成果を中心とした活動報告、動画などを活用し、活動の意義や支援による変化が伝わる情報発信へと見直しを進める。

ホームページや SNS を活用して、より多くの方に当法人の活動を知っていただく機会を増やすとともに、活動報告会や定期的な情報発信を通して既存の会員・寄附者との関係を深め、継続率の向上や会費・寄附額の増加を目指す。また、支援者からの紹介によって支援の輪が広がる仕組みづくりや、寄附しやすい環境の整備を進め、継続的な支援につながる基盤を強化する。

【目標】年間収入 315 万円 個人会員 110 万円 賛助会員 55 万円 寄附金 150 万円

(2) 各法人・団体・個人との連携・協力体制の構築と継続的な情報交換

全国の医療機関、義肢装具製作会社、義肢部品製造・販売会社、自治体、マスメディアならびに障害者スポーツ協会などの各種団体との連携を行う。またイベントを合同で開催する法人及び団体を開拓しパートナーシップの構築を目指す。貸与する運動用手先具や筋電義手の訓練の連携医療機関や運動用義足の運動支援の連携団体を増やし、日本全国で義手・義足を用いたアクティビティの活性化につながる体制づくりを目指す。

(3) 年間活動報告会&10 周年記念イベントの開催

今年度も 2026 年 11 月 1 日（日）、東京大学 山上会館において、年間活動報告および子どもたちの発表会を開催する。支援者、寄付者、助成金関係者をはじめ、これまでイベントに参加・協力いただいた方々、行政・医療・教育関係者、そして関心を持つ人々を招待する予定である。本会の目的は、支援によって生まれた成果を共有し、支援者へ直接感謝を伝えるとともに、子どもたちやクルーの活動の様子を紹介することにある。併せて、設立 10 周年イベントとして位置づけ、関係者で一緒に祝う機会とする。また、活動をより多くの人々に周知し、新たな連携・協働、支援の輪を広げる機会とする。

(4) 事務局体制の整備とクルーの増員、今後の運営

事務局体制の整備に取り組んできた結果、これまで事務局業務を一人で担っていた体制から、現在は 2 名で役割を分担しながら対応できる体制が整い、個人への業務負担の軽減につながっている。

事業運営では各チームが役割を分担しながら主体的に運営を担えるようになった。今年度はイベントチームと SNS チームを統合することで、企画から広報までを一体的に進められる体制へと見直していく。さらに、新たに活動へ参加している家族ならではの経験を生かした情報発信や家族会などを企画するファミリーチームを発足していく。

今後の事業拡大を見据え、本業を持ちながらボランティアとして活動するクルーが、それぞれの状況に応じて無理なく継続的に参加できる運営体制や仕組みづくりを引き続き進める。また、法人の持続的な運営基盤の強化に向け、収益事業の拡大に向けた準備を進めていく。